

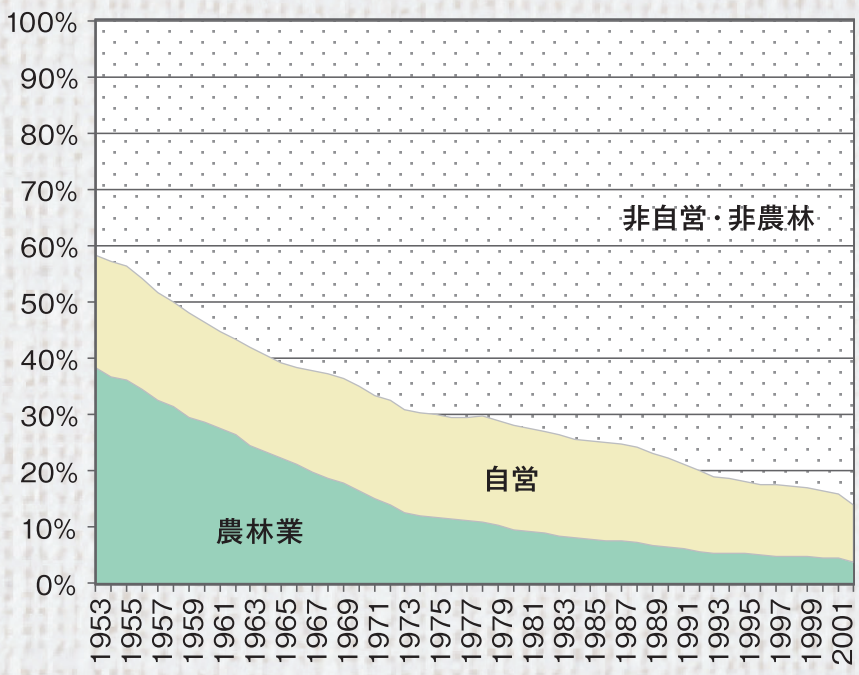
live

19

ライブ live: 「自分らしく輝いて生きる」という想いを込めた男女
共同参画推進のための情報誌です。ぜひご覧ください。

CONTENTS

- 2 特集 家族の過去・現在・未来
- 7 Crossword
- 7 Books & DVD
- 8 大黒柱マザー
～夫が仕事をやめたから
一家で海外に引っ越してみた!～



【自営から雇用へ】

『結婚と家族のこれから』(筒井淳也著)より引用

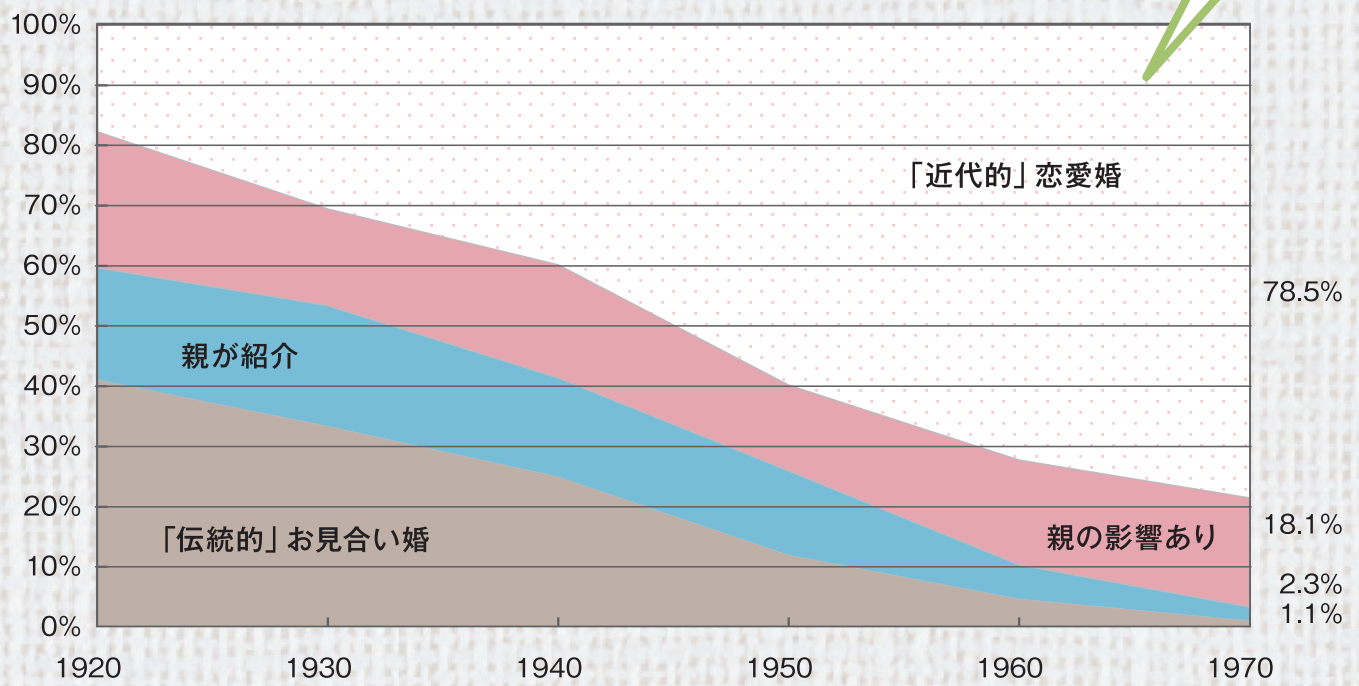
結婚のかたちが変わった背景には、働き方の変化があった!!



【恋愛／お見合い婚】

『結婚と家族のこれから』(筒井淳也著)より引用

恋愛結婚でも、その実、親の意見が反映された人も多い!!



特集
家族の過去・現在・未来



筒井淳也（つついじゅんや）

プロフィール

1970年福岡県生まれ。

一橋大学 社会学部卒業。同大学大学院 社会学
研究科博士課程満期退学。博士(社会学)。

現在、立命館大学 産業社会学部 教授。専門は
家族社会学・計量社会学。

著書に『仕事と家族〜日本はなぜ働きづらく、
産みにくいのか〜』(中公新書)、『結婚と家族の
これから〜共働き社会の限界〜』(光文社新書
などがある。

立命館大学 産業社会学部 教授

筒井淳也
じゅん や 氏

平成29年度の山口市男女共同参画センター講座
で開催された、講話「家族の過去・現在・未来」が
大好評につき、紙上でお届けします。これからの
家族について、ご一緒に考えてみませんか。

家族のかたちを変えた
「自営から雇用へ」

誰もが、家族に関する悩みや問
題を多かれ少なかれ抱えている
ものです。夫婦関係とは、生まれ
たときにはまだ知り合っていない
「誰か」と、人生のどこかのタイ
ミングで一緒になり、そして少な
くとも一定期間は生活をともに
過ごす人との関係です。私たちの
社会では、夫婦関係はたいがい男
女関係でもあります。これに対し
て親子関係とは、たいいちは血の
繋がった「直系」の関係です。この
二つの関係は、家族を構成する大
きな二つの軸になります。この二
つの軸にそって、家族の過去・現
在・未来についてお話をします。

私の専門分野は、家族社会学
です。家族社会学とは何か、とい
うことを論じるのはなかなか
難しいのですが、家族社会学者が
どういった問題意識をもって研
究をしてきたのかを理解するこ
とは意外に簡単です。

日本の家族社会学は、時代の流れに応じた「課題」を引き受けてきました。まずは第二次世界大戦後です。このときの家族の課題とは何だったのか？

年配の人ならおわかりかもしれませんが、戦後の日本の課題は「民主化」でした。政治的には戦前の総動員体制を否定することが至上命題でしたが、民主化は身近な家族のかたちを変える動きでもあったのです。戦前の家族は、明治民法という後ろ盾のもと、家長（戸主、たいていは男性）の強い権限が妻や子どもの行動を制約するものでした。妻からすれば、財産権も持ちません。それどころか、夫が家の外でもうけた子ども（婚外子）^{※1}を家のメンバーに入れないという決定を覆す権利を持っていませんでした。突然夫が他の女性とのあいだに生まれた子ども（庶子）^{※2}を家に連れてきても、迎え入れた上で、「嫡母」として面倒を見る義務が出てくるのです。子どもにしても、住む場所や結婚相手の決定には家長の許可が必要でした。

このような家長の強い権限は、戦後の民法改正によって廃止さ

れます。平等な男女関係、より権威的ではない親子関係、つまり「民主的」な家族関係という理念が徐々に浸透していくわけです。

※1 婚姻の届け出をしていない女性から生まれた子ども。法律上は非嫡出子という言い方もあるが、差別的表現であるという配慮から、現在では婚外子と呼ぶことが多い。
※2 明治民法下では、婚外子のうち父に認知された者を庶子、認知されていない者を私生子として区別していた。

しかし、この家族の民主化の動きはすぐに頓挫します。これが家族社会学者の第二の課題になりました。どういうことかという点、法律制度だけ「民主化」しても不完全だったのです。なぜなら、戦後の日本の家族で経済力を握っているのが相変わらず男性だったからです。



「食べていく」「稼ぐ」というのは、私たちの生活の基本的条件です。戦前の間も戦後しばらくの間も、ほとんどの人にとっての食の扶持^{ぶち}は、家で作る農産物や家での商売を通じて得られるお金でした。家は小さな会社

だったのです。現在も、農家や自営業の人にとってみれば、自宅やその周辺の土地こそが職場です。この小さな会社の社長が、家長でした。家長は社長なのだから社員である妻や子どもに対して強い権限を持っているのは当たり前です。

しかし戦後の経済復興・経済成長のなかで、家は経済生産機能をどんどん失っていきます。つまり、農家や商家が減っていき、人はもっと大きな会社に雇われて、そこで働いて得られる給料で生活するように変わっていくわけです。

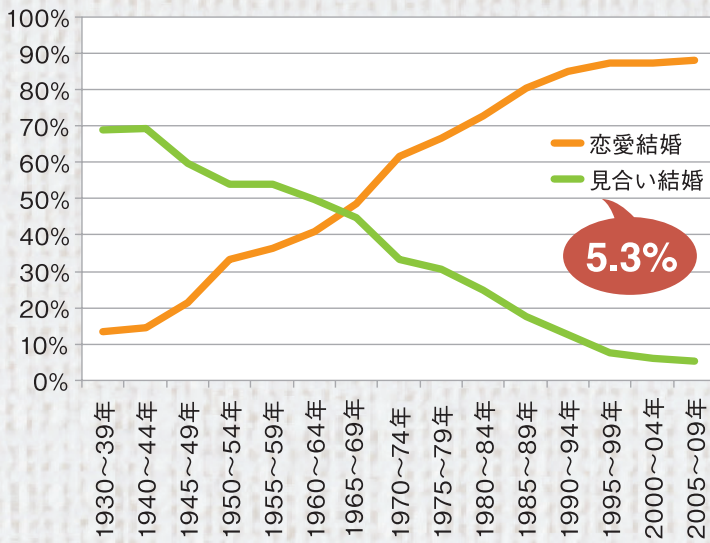
「自営から雇用へ」。この変化（冒頭の図【自営から雇用へ】）は、私たちの生活、特に家族関係を大きく変える原動力になった社会変化です。



「自営から雇用へ」という変化のわかりやすい影響は、結婚です。結婚のかたちが見合い婚から恋愛婚に変化する動因のひとつが、雇用労働へのシフトです。考えてみてください。父親が

社長なら、家Ⅱ会社に誰を嫁として迎え入れるのかの権限も父親にあるのは、ある意味で自然でしょう。ところが、雇用社会では父親はもはや社長ではなく、単なる父親です。子からすれば、お給料をくれるのは父ではなく勤め先の会社です。父に結婚を反対されれば、家を離れて二人で自立した生活を送ればよいのです。ですから、雇用社会で、かつ法律的に家長の権限が決まっていなければ、結婚はほとんど恋愛結婚に変わっていくのです。日本の見

(データ) 恋愛婚と見合い婚の推移



恋愛結婚の数が見合い結婚の数を上回るのは、1960年代半ばでした。2000年代に入ると見合い婚は1割を切り、2005年~2009年の平均だと結婚の5.3%となっています。この背景には、「自営から雇用へ」の社会変化がありました。

合婚の数が恋愛婚を下回ったのは、1960年代のことでした(図)。この時期、まさに日本経済は規模の大きな会社が経済をグイグイと引っ張る高度経済成長期にあったのです。

歴史(近現代史)の教科書には、高度経済成長は必ず登場します。しかしそれと並行して家族のかたちも変わっていったことはほとんど書かれていません。教科書には書かれていないより身近な変化が、この時期に生じてい

たのです。

「お見合い」の不思議

ただ、「お見合い」というのはある意味不思議な結婚行動です。というのは、いわゆる伝統的な結婚では結婚相手を探して連れ回すのも、結婚するかどうかを決めるのも、家長である父親でした。しかし私たちの知っている「見合い」というのはこれとは違

いますね。

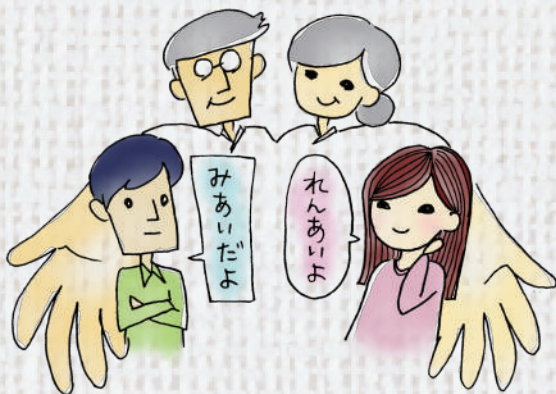
現在の「見合い」というのは、最初の出会いのセッティングを親がすることです(冒頭の図【恋愛／お見合い婚】「親が紹介」の部分)。出会ったあとにどうなるかは本人次第ですね。たいていは、恋愛期間を置いて結婚したり、あるいは続かなかつたり、でしょう。ですから、1960年代に日本の結婚を調査したアメリカの社会学者ブラッドは、おかしな現象にでくわすのです。それは、夫婦に自分たちの結婚について聞いてみると、夫は自分たちの結婚は「見合い」だったと言っているのに、妻は「恋愛」だった、と考えていたのです。要するに、夫は出会いのきっかけが見合いだったのを見合い婚だと考えていて、妻はその後にちゃんと恋愛婚してから結婚したから恋愛婚だと考えていたわけですね。

実は、結婚というのは単純に「見合い」と「恋愛」にきれいに分けられるようなものではありません。たとえば、自分たち自身で出会って結婚しようとしたとき、

私たちは多かれ少なかれ親の同意が必要だ、と考えるでしょう。

実は、現在の恋愛結婚でも、結婚の際に親の影響力があつたと感じている人は2割近くいると考えられています(冒頭の図【恋愛／お見合い婚】「親の影響あり」の部分)。しかもこの親の影響力は、女性が結婚するときにより強くなるのです。なぜでしょうか。

それは、親が考えるに、息子の結婚の幸せが結婚相手にかかっていると考える人よりも、娘の結婚の幸せが結婚相手次第だと考えている親が多いからです。なぜそうなのかといえば、答えは単純です。結婚相手の男性の「食べていく」ための稼ぎがしっかりして



いるかどうかを親は見ているのです。

これは、私たちがいまだに「男性が稼いで女性が家事をする」という性別分業社会に在ることの現れなのです。家事分担もいまだに妻に大きく偏ったままです(図)。女性が専業主婦化するのには、戦後のことでした。およそ1970年前後くらいに、専業主婦の割合が最も高くなります。その前は自営の家族従業者として、その後は会社に雇われて、女性が働いてきました。

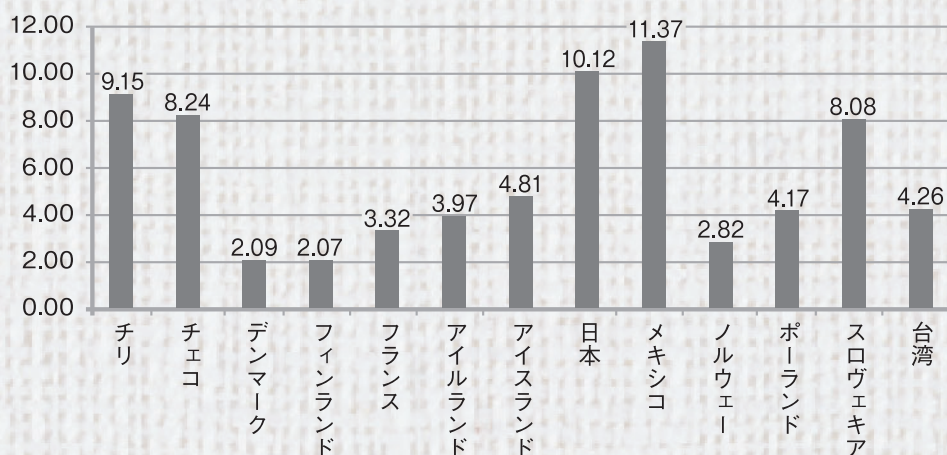
振り返りましょう。「自営から雇用へ」という変化によって、子どもが経済的に自立したことが恋愛婚へのシフトを生み出しました。他方で、雇用の世界で女性が自立することが難しいことが、女性の結婚の「自由化」を不完全なままにしている理由です。

家族において「民主化」を推し進めるといふ課題は、戦後の民法の民主化だけでは達成できませんでした。男女平等を実質的なものにするためには、男女がともに対等に働ける環境が必要だったわけです。

現在、「女性活躍」のスローガン

家事分担の実態

共働き夫婦における夫婦の週あたりの家事時間の差(妻家事時間-夫家事時間)



出典) 筒井淳也(2014)「女性の労働参加と性別分業」『日本労働研究雑誌』648: 70-83.

「日本の男性は家事をしない」という事実に対して、男性は長時間働いているからだ、という反論がよくありますが、同じくらいの時間働いて、同じくらいの稼ぎがある夫婦に限ってみても、日本の女性は週あたり10時間以上も夫より多く家事をしています。

のもとで、共働き社会への変革が進行中です。この動きは、家族における女性の地位向上という点からしても、理にかなった変化です。

「系」がわかれば家族もわかる

今度は家族のもう一つの側面、つまり親子関係に目を向けてみましょう。

私たちは、家族について、しばしば「直系」「傍系」「父系」「母系」といった言葉を耳にします。しかし、そもそも「系」とは何なのでしようか? 「系」にはいくつか

の意味がありますが、ひとつには「何が継承されるライン」という意味があります。では、家族に關しては、何が継承されるのでしょうか?

家Ⅱ会社(自営業)の場合、継承されるのは家の稼ぎの手段、すなわち田畑や店舗になります。商店の場合、顧客や取引先とのつながりも受け継がれるものの一つでしょう。これが父-息子のラインで継承されるのが、父系制度です。日本の場合、父系制度は律令制の導入を契機として広がり、基本的には第二次世界大戦終戦まで続きます。

父系制度の導入は、少なくとも日本においては「上から」の強制という側面がありました。農作や商売で食べていくこと自体は、生産手段が父系で継承されなくても可能です。子どもたちのうち、有能な人に継がせるか、あるいは有能な人と結婚させて継承させればよいのです。江戸期の商家ではよく見られた、有能な娘婿が経営を引き継ぐというやり方です。にもかかわらず父系が導入されたのは、その時代時代の政府が生産手段や官職の所有権を父系で

継承させ、それを管理しようという意図があったからです。

さて、戦後の家族で継承されるものといえば何でしょうか。農家や自営業の家では、依然として生産手段が継承されます。が、雇われて働く人はどうでしょう。

ひとつには、住む場所、すなわち住居と土地があります。金融資産なども含めて、財産は家族に相続されていきます。ただ、戦後の「家族の民主化」によって相続は均等化されますから、財産継承の意味は小さくなってきました。かつては「親の家に住み続けること」は生活基盤の安定という意味があつたでしょうが、現在では介護を引き受ける義務になってしまっています。ですので、雇用社会が普及した1960年代以降、「結婚するなら次男以下」という考え方が登場してくるのです。

他には、姓や祭祀権さいしけんがあります。姓の継承に価値を置くかどうかは、今では人によるでしょう。かつて「食べていくこと」が家の継承権にかかつていた時代では、姓を受け継ぐことは非常に大事なことでした。現在では、子孫に姓が継承されるかどうかは、主に

「気持ちの問題」になっています。自分の姓を継ぐ人が途絶えることに一抹の寂しさを感じる人はまだいるでしょう。しかし子ども世代にとってはそれほど気にすべきことではありません。姓を継承すること自体のメリットは小さくなっていくからです。

祭祀権とは、先祖を供養する仏壇を所有し、祭祀を主催する権利のことです。これも、農業・自営業、あるいは官職が世襲されるような社会では手放したくない権利だつたでしょう。現在ではしかし、祭祀権はできるだけ引き受けたくない何かになってしまっています。

要するに、「系」に沿った継承はむしろ「迷惑なもの」になっているのです。この変化のひとつの表れが、お墓です。

私は現在京都に住んでいます。すが、実家は福岡にあります。きょうだいは姉が一人いますが、結婚して姓を変えています。ある日帰省したおりに、両親から「お墓を買った」と聞かされました。自宅から自動車です30分ほど行つ



たところにある、山の中の高台の墓地でした。

お墓の話をしていたとき、両親はなんだか気まずいような、すまななさそうな顔をしていたような記憶が残っています。「面倒だらうけど頼むよ」といったふうです。

そう、子どもたちにとって先祖のお墓を守り抜くことは、現在では大変なことなのです。自分がこれからどこに住むのか、実家のあつた土地に帰ることができると、自分はいよいよ、自分の子どもや孫の代まで姓を継承し、その土地に住みつづけ、墓を守り抜く「誰か」がいつまでも存在するのかが、いろんな条件を考えると、家墓が将来にわたって継承されるのはほぼ不可能だと思えて

しまいます。

事実、いくつかの自治体の調査結果から、すでに半分以上のお墓が「無縁墓」になっている墓地もあることがわかっています。

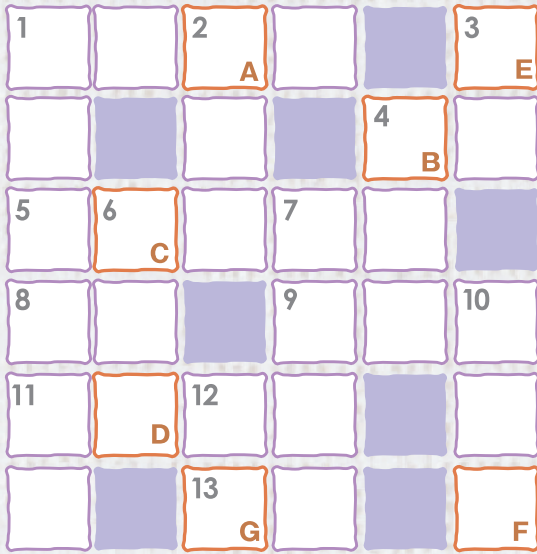
家族は将来、どうなるのでしょうか。不確定な部分もありますが、戦後私たちが「当たり前」とみなしていたような家族の私たちは、一定の社会的・経済的条件においてのみ可能だったものです。

家族は、変わっています。変わっているからこそ、そのなかにいる私たちはいろいろな悩みを抱え込むわけです。日本は現在、共働き社会に変化する途上にあります。家事や育児の分担で多くの夫婦が悩むのは当たり前です。日本は現在、少子化しています。「誰かが自分の〈家〉をずっと継いで、お墓を守ってくれるだろう」という想定はできなくなっています。

家族をより長い視点から眺めてみることで、私たち一人ひとりの悩みが、むしろ私たちの社会の問題であることがよく理解できるはずです。

正解者のうち抽選で30名の方に図書カードを差し上げます。

Crossword



答えは



です！

ヨコノカギ

- 1 山口市男女共同〇〇〇〇〇〇
センター愛称はゆめぼぼら
俗、続、属、読み方は
- 5 学名、カガリビバナ、ブタノ
マンジュウとよばれる花
- 8 人生〇〇あり、谷あり
- 9 山口の方言で、結ぶ、
束ねること
- 11 十二支の一番最後の干支は
〇〇バツグ、
〇〇ノミー症候群

タテノカギ

- 1 お笑い芸人〇〇〇〇〇〇〇〇池崎
- 2 今は手軽に、携帯やスマホに内蔵
〇〇年、くる年
- 4 ゲームバイオオハザードに
出てくる怖いお化け
- 6 世界遺産〇〇〇〇古道は和歌山県
中南米の国、
北アメリカ南部に位置する国
- 7 見るを英語で
- 10 スペインの習慣、昼休憩を
〇〇スタと言います

■応募資格 市内在住か、在勤の方

■応募方法 3月15日(木)までに、はがきに答え・
郵便番号・住所・氏名・年齢・感想をご記入の上、
下記へ送付してください(当日消印有効)。

〒753-0074 山口市中央二丁目5-1

山口市男女共同参画センター ゆめぼぼら 宛

※正解者のうち抽選で30名の方に図書カードを差し上げます。

なお、当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。

これらの図書は、山口市男女共同参画センターにて貸し出しています。

Books & DVD

DVD

「家族はつらいよ」〈松竹〉

結婚50年になる夫婦。妻が誕生日プレゼントに
欲しいと言ったのは…なんと「離婚届」！思いも
かけない熟年離婚をめぐって家族が大騒動。ご存
じ山田洋次監督が贈る笑いと共感に満ちた痛快
ヒューマンコメディです。

「無縁社会」がテーマの続編『家族はつらいよ2』も
あわせてご覧ください。

BOOK

「日豪往復出稼ぎ日記」

小島慶子著 〈講談社〉

夫は仕事を辞め、一家はオーストラリアに移住し、
妻は一家の大黒柱となった。日豪を往復するなかで
の出来事に繊細に反応する筆者の感覚と思考を描い
ている。

人の数だけ生き方があることを認め、その自由
と重さを説いている。

BOOK

「結婚と家族のこれから ～共働き社会の限界～」

筒井淳也著 〈光文社新書〉

経済社会では「男は仕事、女は家庭」のもと、男性の
働きで家族は守られていた。

共働き時代になると仕事も家事も男女平等となり、
男性の家事参画が求められている。

これからの家族は男性も女性も仕事と家事のワー
クライフバランスが求められていると著者は言う。



平成29年度山口市男女共同参画
センターフェスティバルより

大黒柱マザー

「夫が仕事をやめたから
一家で海外に引っ越してみた！」

小島 慶子氏

タレント、エッセイスト

1972年 オーストラリア生まれ。
1995年 TBSに入社。
学習院大学法学部政治学科卒業。
アナウンサーとしてテレビラジオに出演。
1999年 第36回ギャラクシー
DJバーンナリティー賞受賞。
2010年 TBSを退社。
以降、タレント、エッセイストとして活躍。

あるとき、小島さんの夫が20年以上のキャリアを捨て、仕事を辞めたいと言いました。実は、小島さんも数年前に15年間勤めたテレビ局を辞めて、どう生きていくべきかを考えた時に、夫が応援してくれたので、今度は夫の気持ちを受け入れようと思っただけです。

しかし、実際に、暮らしが始まってみると、「男が仕事をしないこと」「一銭も稼がない夫」にガツカリし、小島さんは自分自身の器の小ささを感じたそうです。

小島さんは、「男が仕事を辞めると、一時期、人間失格のように言われていたし、両親に大企業の夫と結婚し幸せになるようにと言われていて、先に結婚している姉のようにならなくては幸せになれないという刷り込みを克服するのに時間がかかりました」と語ります。

そこで、小島さんは、失業した夫を見る目を変えるには、「仕事を辞めて良かったね」と言える環境に変えようと思いつきます。

夫が仕事を辞めたから、東京以外に住めると考え、国内出稼ぎ妻になることを決心。現在中学校3年生と小学校6年生の息子が2人、英語を習得し、全く違う環境で育った人達とも上手くやっていける人になるようにと考えた末に、オーストラリアのパスに教育移住をすることに決めました。

現在、移住して4年目。夫はいきいきとし、夫の人生にとっても良い選択をしたと小島さんは言います。「移住してからは、私が大黒柱マザーです。移住当時、英語のしゃべれない夫が引っ越

しの手続きや船便の手配、もろもろの手続きを一手に引き受けてくれました。子どもたちは英語の壁にもホームシックにもかからず、オーストラリアの生活を楽しくできています。お陰で、1年で現地の生活にもなじめた時に、夫のことを頼りがいのある人だと感じ、「生きる力」のある人だと思えました。年収や肩書で人を見ていた自分から解放され、今はさまざまな縛りからも解放されています」と小島さんは語ります。

小島さんは、「大黒柱マザー」になってみて、自分の周囲に大黒柱をやっている、また大黒柱をやらなくてはならない事情のある女性が多くなっていると感じるそうです。「働き方改革」は人間らしく家庭生活を充実させる制度です。20年前、10年前を考えてみれば世の中は変わってきています。「人生には予想もしない出来事だってあります。どんな選択をしても、誰もが幸せになる人生を歩みたいですね」と小島さんの自然体の優しさに、会場は包み込まれました。